

#### (4) 大叔父は海軍リベラル派

もうひとり加藤に大きな影響を与えた親族がいる。のちに海軍中将となる岩村清一（1889—1970）である。海軍兵学校を経て海軍大学を首席で卒業。1925（大正14）年に在イギリス日本大使館付海軍武官に就き、1930（昭和5）年にはロンドン海軍軍縮会議に全権随員として出席した。そのときの経験から、日本はアメリカに勝てないと確信し、日米開戦に反対する海軍リベラル派のひとりであった。（右写真：岩村清一）



しかも、岩村は政治学者高木八尺（1889—1984）の妹美須代と結婚する。岩村と高木は同年齢で義兄弟関係にあった。高木はアメリカ政治史の研究者で、海軍情報に詳しく、日米開戦に反対していた。高木の海軍情報の一部は岩村から得ていたのかもしれないし、岩村の考えに高木の影響があったかもしれない。

岩村の実姉ツタは、加藤にとって祖母になるが、岩村はツタを慕って、しばしば加藤の家を訪ねた。加藤の家では岩村を歓迎し「提督」とか「おじさん」とか呼んで歓迎した。

中学生の頃、加藤は巡洋艦の見学に招かれたことがある。そのときの印象を『羊の歌』『美竹町の家』に綴る。

私は子供の頃巡洋艦に招かれたことをよく覚えている。それは県知事になった伯父の権力をはじめてみたときとは全くちがう印象を私にあたえた。県知事には役人がへつらっていた。県庁の役人たちは、ほとんど陰惨な気をおこさせるほど卑屈だった。しかし

巡洋艦の水平たちは少しも卑屈ではなかった。彼らはお世辞をいわず、必要最小限度以外は口をひらかず、しかし敏捷で、正確で、能率的で、艦長の客に対しては申し分なくゆきとどいていた。そこでは人間の組織が機械のように動き、ほとんど美的な感動をあたえた。

加藤は、権力というものの一面を見て「権力嫌い」となり、海軍の規律を見て「秩序の美」を知ったのである。そのいずれもが、加藤の生涯にわたって活きている。しかし「権力嫌い」が強いゆえに、秩序美に感動するものの、保守主義に到らなかった一因だろう。

岩村は加藤たちにオークション・ブリッジを教え、イギリスの文化や歴史について語ったらしい。そして戦争についても話すこともあった。そのことを加藤は『私にとっての20世紀』（岩波書店）に、次のように述べる。

私のおじは海軍艦政本部長だったのです。艦政本部というところは、船を作る場所ですから、彼もやはり希望はないと考えていました。

軍人だから、政治的な状況ということよりも、軍事技術的に考えていた。英国または米国の海軍と一国相手ならば戦争の作戦は立てられる。しかし、日本には英米と同時に戦争するだけの船はない。だから、作戦は成り立たない。作戦計画がそもそも立てられない戦争を始めるのは愚かなことである。

岩村の述べる言葉は、加藤に「反戦」の考えを芽生えさせただけでなく、加藤の従兄の藤山樞一には外交官の道を歩むきっかけを与えたのである。